

【事業運営部門】 ① 子どもの居場所 事業

チーフディレクター 相澤 心平（あいしん）

《 あゆみ 》

根っこわーくすの目指す『誰もが自分を生き、多様な個性が生きる社会』を体現するために『自己肯定感が育つ居場所』づくりを始めて8年。

●2017年～ いどこ塾 = 「居場所」×「生きるチカラを育む」

当初は、“生きるチカラを育む”教育的視点に力点を置いてスタート。人のつながりが心の居場所となるというオモイのもと、特定の拠点を持たずに野外フィールドで毎週継続して開催。

●2020年～ 放課後いどこ塾

大阪府交野市に新たな子育て拠点として「交野こそだちベースtomos」を取得したことをきっかけに、週末だけでなく平日放課後の居場所づくりを展開。その後、市との連携を深めて日本財団「子ども第三の居場所事業」の運営をはじめ、目指す社会の実現に向けての居場所づくりを加速。

子どもの居場所 事業は…

「自分は自分であって大丈夫」と思える

自己肯定感が育つ居場所をつくります。

《 いま と これから 》

2024年度は、新しく建て替えたtomosで放課後いどこ塾を新しい形で再スタートを切りました。その中で、参加者の急増にも関わらずリピーターが少ないという実状、交野市内小学校への送迎や軽食提供などの新しい運営の模索と向き合うべき課題が多くありました。

そこから見えてきた方向性は、「“教育”から“教育福祉”へ」というキーワードでした。これまで立ち上げ当初から変わらず“主体性”や“生きるチカラを育てる”という教育的視点で関わってきました。わたしたちの現状を見直したとき、まずは安心の土台をつくる福祉的視点が重要であると再確認しました。

次年度は、安心の土台の上に“自己肯定感が育つ”居場所が実現していくために「教育福祉」的環境づくりの実践に取り組み、より豊かであたたかい居場所へ向かいます。具体的には、多様なおとなが関わることでできるための体制をつくることや、「いどこへ行きたい！」と思った時に参加しやすくなる仕組みづくりを試行錯誤していきます。

《 2024年度 総括報告 》

1. 全体を通して p.3

- ◎ 参加者の減少傾向
- ◎ 「いどこ」と「塾」…教育的な関わりから、「教育福祉」を意識した関わりへ
- ◎ ひとのつながり＝安心の土壌をつくる

2. 2024年度方針とその報告 p.5

- ① 豊かな関わりを生む環境をつくる。
- ② 改めて、文化を共につくっていく。
- ③ 保護者との対話の場

《 2024年度 各事業報告 》

3. 週末いどこ p.7

いどこ塾（毎週末の日帰りキャンプ、毎月1回の宿泊キャンプ）

- ① 実績（開催日数、参加者数、ボランティアスタッフ数）
- ② トピック

4. 平日いどこ p.8

放課後いどこ塾（毎週月水金曜日15:00～19:00）

- ① 実績（開催日数、参加者数、ボランティアスタッフ数）
- ② トピック

《 2025年度 方針 》

5. 2025年度 方針 p.10

- ① 事業に関わるおとなを積極的に受け入れる
- ② 参加しやすい仕組みづくりを通して参加者数 平均 15人 を目指す

《 2024年度 総括報告 》

1. 全体を通して

◎ 参加者の減少傾向

日本財団「子ども第三の居場所 交野拠点」として本格始動した本年度は、平日月水金の「放課後いどこ塾」の運営に注力してきました。

4月当初は、新しい居場所としての広報や今まで関わっていた方の口コミなどのおかげで参加する子どもが多くいました。水曜日の「いどこ食堂」の参加者は20人を超える日も少なくはなく、30人を超える日もあるほどでした。しかし、継続して参加する子どもは多くないことが夏あたりからの課題としてあがりました。

一方で、週末の「いどこ塾」はこの8年の積み重ねをもとに変わらず続けてきました。数年前は申込みにあふれて抽選というシステムで30人まで絞っていた参加者数は激減し、申込みですら10人にも満たないことが続くようになりました。

それらの原因を探る中で、根っこわーくすとしての大切にしていきたいことを確認していく1年でもありました。

◎ 「いどこ」と「塾」……教育的な関わりから、『教育福祉』を意識した関わりへ

参加者離れを起こしている一番の要因は、ここにまた来たくなくなるような安心感は生まれない環境になっている、ということです。

「楽しかった！」とは言って帰るものの、もう参加はして来ない…

実は、嫌な思いをして家で泣いていた…と傷ついている子の存在…

パツパツと来なくなってきた何人かの姿から見えてきたことがありました。

わたしたちの居場所は、『自由』の枠組みが大きく、“何をしたいのか分からない…”と自由に過ごすことに慣れていない子どもにとっては困る場面が多く生まれています。おとなにとってもその状態は居心地が悪い場面です。そんな中で、スタッフは「自分で考えてみよ」「一回、やってみよう」という、“挑戦”や“心の冒険”を促すような声掛けなどの教育的な関わりを強く出していたことに気づきました。そんなおとなたちの姿を見て、リピーターの子もたちも模倣して関わります。「そのくらい自分で考えてみいよ」「貸してほしいなら言えばいいやん。」子どもながらの忖度のないまっすぐな表現は、まだこの場に慣れていない子どもたちにより強く攻撃的に伝わり、心に傷を残します。

わたしたち根っこわーくすスタッフが、子どもたちとの関わりを今一度見直さないといけません。本来は「自分は自分であって大丈夫」という安心の土台＝『いどこ』、そしてその上にある「自分で考え自分で選択する」「困ったときは助けを求める」という主体性が育っていく経験的学び＝『塾』であるべきです。

◎ ひとのつながり＝安心の土壌をつくる

こんな当たり前のことを忘れてしまっていた…そんな中で傷ついてしまっている子がいる…そんなことにショックを受けて、丁寧に関わり直していくことにシフトチェンジしていきました。「建物はなくても、自分たちの存在が安心して帰ってくる居場所になる」という思いで立ち上げ、はじめた“いどこ塾”のように、まずは安心の土台をつくること。つながりをつくること。そして、その結果、帰ってきたくなるような居場所になるような関わりをつくっていきます。

2. 2024年度方針とその報告

【24年度方針】

- ① 豊かな関わりを生む環境をつくる。
- ② 改めて、文化を共につくっていく。
- ③ 保護者との対話の場

→ 【報告】

- ◎コーナーあそび（〇〇コーナー）の実施
 - ◎多様なおとなの関わりを創出
- ◎子どもたちとの対話
- ◎放課後いどご塾の送迎にて

① 豊かな関わりを生む環境をつくる。

◎コーナーあそび（〇〇コーナー）の実施（10月～）

年度半ばに現状分析をした中で出てきた以下の課題から仮説を立て、解決策として実施しました。

【課題】

- ・「自由に好きなことをしていいんだよ」と言われても、なにをしていいのかわからない…と戸惑い、自由な時間を存分に楽しめていない子どもの姿がみられる。
- ・一度、来なくなったら改めて申し込むキッカケがなく、参加に結びつかない。
- ・ベテランたちにとって、マンネリ化して刺激がない。

【仮説】 自由に選択できるほどの選択肢が子ども自身の中にあるのではないかと

- まずは自分の好きなもの、心地良い感覚にいっぱい触れることが必要
- 多様な世界との出会いや経験をもっとたくさんする機会が必要

【実績】 コーナーあそび（〇〇コーナー）の実施

週末いどご塾では、11月「弓矢づくり」、2月「ねじパン」、3月「米炊き」

平日いどご塾では、計画含め6回ほど。

（あけみちゃんのお菓子作り、あつこさんのカードゲーム、土井さんのダジックアースなど）

【結果】

- ・「全員参加」ではなく『いちコーナーとして参加自由』という環境設定がちょうどよかった
- ・思わずやりたくなるようなしかけで、内なる好奇心を刺激している
- ・分かりやすいコンテンツ（内容）に反応して来る参加者がいる。保護者も送り出しやすい
- ・共通の体験をする。また、教え合うなどの関わりを通じて、関係が生まれやすくなる
- ・たねスタ（ボランティアスタッフ）のおとなたちもわくわくしている
- ・コンテンツ内容、新しい関わり、おとなの姿…子どもたちの世界を拓ける機会になっている

◎多様なおとなの関わりを創出

・ ボランティアサイトを通じての軽食づくりボランティアの存在

activoというボランティアサイトでの募集をきっかけに、9月から軽食づくりをしてくださる方がいます。当初、子ども食堂への興味から応募をいただき、月1回程度のつもりで関わってくださりました。今では、毎回楽しみにしてきてくださり、材料寄付を含めて、放課後いどこ塾の軽食づくりがその方のよろこびにもなっている様子が、2週に1回くらいは関わってくださるようになりました。

・ 〇〇コーナーの実施

わくわくしたおとながしたいことをする！そんなわくわくにつられて、子どもたちも今までやったことないこと、新しいことにチャレンジしてやってみる！というオモイで始めました。おとなが関わることで子どもたちにとって「こんな人もいるんだ」といろいろなモデルを見てもらえることになり、自己実現の幅が広がっています。

そんなオモイに賛同してくれた方が、「他にもやりたいおとながいるはず。型があれば、その人もやりやすくなる」とそのコーナーの型づくりに積極的に参画してくれ、共に場を創ってくれています。

② 改めて、文化を共につくっていく。

◎ 子どもたちとの対話

けんか、お金の使い方、傷ついている子がいる現状や日々巻き起こる違和感をおわりの会を中心に子どもたちとの対話の中で互いのオモイを聞き合ってきました。解決に向かうだけでなく、今それをどう感じているのかを伝え合うことも大切にしています。

小5の男の子が、「なにかあったら、気持ちを聞いてくれるから、その人が何を考えているかわかる」と言っていたことが印象的です。

③ 保護者との対話の場

◎ 放課後いどこ塾の送迎にて

帰りの送迎時、各家庭に送るため保護者と1対1で会ってお話する機会が増えました。その際に、近況などを伝え合ったり、オモイを聞いたりして、子どもを真ん中に居場所を共に創っている感覚があります。

《 2024年度 各事業報告 》

3. 週末いどこ

いどこ塾（毎週末の日帰りキャンプ、毎月1回の宿泊キャンプ）

① 実績

開催回数・・・48回

参加者数・・・延べ 605人

ボランティアスタッフ数・・・延べ 100人

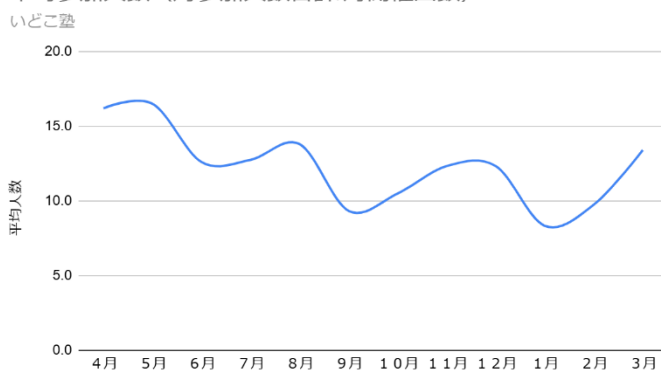
【昨年度実績】

開催回数・・・50回

参加者数・・・延べ1,077人

ボランティアスタッフ数・・・延べ 178人

平均参加人数（月参加人数合計/月開催回数）



② トピック

○ 参加者数の激減

参加者もたねおくりスタッフも累計数は前年度のほぼ半分の人数となっています。この1年の軌跡を見ても右肩下がりに減っています。事業継続を危ぶまれるほどに深刻な状況だが、その原因をつかみきれなかったことで対応が遅れました。

○ 申込みシステムの変更

自動決済サービスのPeatixを導入しました。そのメリットとして、申込開始時期を“2か月前”から“1か月前”へと変更し、締切も開催日前日まで可能となりました。その結果、参加者にとって申込がやりやすくなったのではないかと思います。

また、参加費の管理は個別計算で間違いが生まれやすく精神的負担もありました。自動決済となることで、金額計算の間違いはなくなり、運営側も参加者側も入金に伴う煩わしさは軽減できました。

4. 平日いどこ

放課後いどこ塾（毎週月水金曜日15:00～19:00）

（水曜日には、「いどこ食堂」15:30～18:30）

① 実績

開催回数・・・ 125回

参加者数・・・延べ 1363名

ボランティアスタッフ数・・・延べ 109名

【昨年度実績】

開催回数・・・108回

参加者数・・・延べ898人

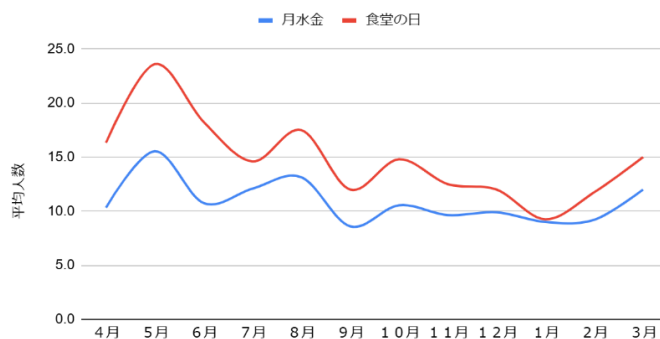
ボランティアスタッフ数・・・延べ 146人

月金…後半にかけて、増加してリピーターも安定。私市小多め。

水…年度はじめは20人超。だんだんとメンバー固定化して10人前後。

平均参加人数（月参加人数合計/月開催回数）

放課後いどこ塾



【交野市小学校の送迎登録者数】

旭 … 2名

岩船 … 8名

倉治 … 1名

藤が尾… 4名

星田 … 3名

妙見坂… 9名

みらい… 2名

② トピック

○ 放課後いどこ塾の在り方を子どもと共に考える

放課後いどこ塾の場をどうすれば、安心して「また来たい！」と思える“自分が自分でいられる”居場所になるかをおわりの会で問うことをしました。その大前提として“この居場所が安心して楽しい居場所でありたい”と子どもと共有認識をした上で、対話通しておとなも子どもも一緒に考えていきました。その中で印象的なことはトピックが2つあります。

・ 『コクが必要』

放課後いどこ塾で過ごすにあたって、“楽しい！”や“うれしい！”が大切と答える子どもが多い中、「それだけじゃあかん」と言い出した子がいました。だれもが「なんで？」となる中、その心を聞きました。そこで生まれてきたことは、「たのしい50%、うれしい43%、残りの7%はごったな気持ち」…ごった

な気持ちとは、『嫌だ、怒り、うざい、悲しい…』。それがあつて、「過ごす時間にコクや深みが出る！それがおもしろい！」と。そしてそれが全部解放されることで心がスッキリするのだそうです。

「なるほど！たしかに。」頭で考えた答えではなく、自身の経験からくるこの感覚をもとにしたコトバは、おとなも含むメンバーの納得感を生みました。

・『料理とあそびの両立』

いどご食堂は、“調理、みんなで食べる、片づける”と行程があるために“自由にあそび”という期待とのバランスが悪い一面もありました。

「どちらもしたい」という声があがり、子どもたちと相談して、食堂と自由あそびを両立してみる日をおためし開催しました。メニューは簡単に、そして煮込む間に遊べるであろう“カレー”を選択して、ホワイトボードセッティングや机を並べるなどの始める準備も普段より早く済ませていました。自分たちで決めたことは主体的に動く姿が見られました。しかし…あそびも料理も中途半端になるという結果となり、結局そのプランはそのときだけとなりました。

○ いどご食堂の環境設定

だんだんと上がってきた全体的な調理レベルに合わせてメニューを複雑にしすぎて、おとなのサポートなしには成り立たず、タスクに追われて楽しめない数回がありました。それを踏まえて、環境設定としてのメニューを簡単にして、その中での自由度をあげることで満足感を生み出すようにしました。

○ 送迎の必要性と課題

送迎の必要性を実感すると同時に、継続するためには簡略化する必要性も感じていました。

お迎え…学校ごと、学年ごと、曜日ごとの終了時間の違いや定期的にある早帰りにより、毎回のコースと時間の設定が毎回必要となります。その設定を参加者へ前日にLINEで共有するタスクがあります。その複雑性が課題となっています。

送り…放課後終了後19時から1時間ほどかけて各家庭を回ります。その車内では、普段は関わりのない子同士のしょうもないお戯れから、「実はね…」という本音トークなど有意義ではあります。しかし、スタッフの振り返りができない課題などが引き起っています。

《 2025年度 方針 》

5. 2025 年度 方針

より豊かであたたかい居場所へ＝「教育福祉」的環境づくりの実践に取り組む

丁寧な関わり合いが生まれる環境を整えて、子どもたちにとっての安心・安全の土台を築きます。その土台の上に、多様な人がお互いに刺激し合って豊かな経験が起こる仕組みを創ります。

① 事業に関わるおとなを積極的に受け入れる

- ◎多様な関わりが生まれる機会をつくる（＝居場所の豊かさ）
- ◎子どもと関わるおとなが増える（＝居場所のあたたかさ）

② 参加しやすい仕組みづくりを通して参加者数 平均 15人 を目指す

- ◎週末のいどころ塾 受付体制の変更

① 事業に関わるおとなを積極的に受け入れる

◎多様な関わりが生まれる機会をつくる（＝居場所の豊かさ）

人手不足を補うためではなく、子どもたちにとって多様な関わりを生むためのボランティア受入れを積極的に行います。

また、子どもと直接関わるだけでなく、おとな自身にとってもオモイが叶ってよろこびになっている場への参画を促し、地域の方々にも開かれた場をつくっていく。（放課後の軽食づくり、送迎、事務、○○コーナーを担当するなど）

◎子どもと関わるおとなが増える（＝居場所のあたたかさ）

子どもと関わるおとなが増えることで…

- 子どもひとりひとりに対して丁寧に関わるゆとりが生まれる
- 対話を通して、個に合った本当に必要な関わりができる
- 子どもたちの安心感が生まれる
- また来たくなる、あたたかさが生まれる

② 参加しやすい仕組みづくりを通して参加者数 平均 15人を目指す

放課後いどご塾もいどご塾も、以下の理由から毎回15人ほどの参加者数を設定し、目指します。

そのために、必要な人に届くようなしかけと仕組みをつくっていきます。

- ・人数が少なすぎる … 関係性が固定していき、世界が広がっていきにくい
- ・人数が多すぎる … おとなが余裕をもって関わるのが難しくなる
- ・事業運営を継続していくために経済的な観点から最低限の収入を得る必要性がある

◎週末のいどご塾 受付体制の変更（4/1～受付開始分＝5月開催分より施行）

- ・申し込み期間の廃止

だれもが、いつでも申込が可能になります。

日程が決まり次第、参加申込み受付サイト“Peatix”のイベントページにて随時受け付けます。

たねおくりマンスリーサポーター家族は特典として、申込みは確約します。

- ・定員を20人に変更

安心の土台をつくり、互いを刺激して豊かな居場所となるために定員人数を再設定します。